

令和 5 年 5 月 30 日現在

機関番号：34315

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2022

課題番号：20K22254

研究課題名(和文) 英語圏短期留学プログラムの教育的意義について

研究課題名(英文) Educational Impact of Short-term Study Abroad Programs for English Language Learning

研究代表者

北野 知佳 (Kitano, Chika)

立命館大学・言語教育センター・嘱託講師

研究者番号：70838325

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ネイティブ信仰が根強く残る日本の英語教育を批判的に分析し、コミュニケーション型な英語力習得のための短期留学プログラム構築を考察した。当初は、物理的な移動を伴う留学が研究対象であったが、コロナ禍ではオンラインでの短期交流や単位取得プログラムに変更し主にデータ収集、分析を行った。結果、理想的な英語話者をInner Circleの英語話者と限定せず、多様な英語話者と交流を図ろうとする学習者は積極的な学習姿勢が見られた。また、オンライン学習で顕著となったのは、学習者の身体・物質的資源の活用であり、今後のオンライン上での言語学習環境構築の重要な点として示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、Inner Circleの英語を絶対視するネイティブ信仰のもと、初の海外での異文化交流を期待して短期留学に参加するのではなく、短期留学であっても、多様な英語話者を想定して、英語学習を行い、異文化交流の機会を増やすことを動機付けることの重要性を示唆している。短期留学における、事前事後学習の学習内容に一石を投じるものである。また、オンライン交流下でも、言語は相手との交渉の中で構築されるという考えのもと、言語的情報のみならず、視覚的、感覚的情報を共有しながら言語交流を図ることの効果を示した事例研究の結果は今後のオンライン交流の充実に寄与するものである。

研究成果の概要(英文)：The study critically analysed the native-speakerism in English language education from the perspective of English language ideology. The interview data from this study was used to examine the effectiveness of short-term study abroad programmes for communicative English language acquisition. Initially, study abroad programmes involving physical travel were the subject of the study. However, this study changed the research target to online short-term exchange programme, which was mainstream under the COVID19 pandemic. The results showed that learners who did not limit their ideal English speakers to Inner Circle English speakers, but sought to interact with a variety of English speakers, showed a positive learning attitude. What was also noticeable in online learning was the use of learners' physical and material resources, which was suggested as an important aspect of future online language learning environment.

研究分野：社会言語学

キーワード：英語学習 短期留学 ネイティブ信仰 オンライン学習 身体性 物質性

1. 研究開始当初の背景

我が国では、1ヶ月以内の短期留学プログラムは、参加者数は最も多いものの、3ヶ月以上の中長期留学に向けての橋渡しや、お試しの場として提供される学習プログラムとして、その効果は、単なる留学直前、直後の語学スキルの向上の有無の調査など、一面的な教育的効果に対する考察にとどまるものが多い。短期留学日本人留学生たちのグローバル人材の育成に寄与するコミュニケーション的な英語力の向上に、どのようにつながるかといった教育効果や留学プログラムの枠組みについての包括的な分析がほとんどない。また、英語習得のための留学先のほとんどが英語が第一言語と言われるいわゆるインナーサークルであり、ネイティブとノンネイティブの二項対立の根強いネイティブ信仰のもと、英語習得を目指すことが暗に推奨されてきた。

2. 研究の目的

いわゆるネイティブと交流することを夢見てインナーサークルへ留学する日本人学生たちが、留学先での対話者として最も可能性の高い、非英語圏、とりわけアジアからの留学生と接点を持つとうとしない傾向がある (Kobayashi,2006, 2010, Kitano,2020)という背景を受け、様々な英語話者とも積極的に交流するための動機付けの機会、しいては、コミュニケーション的な英語力習得のための事前事後学習を含めた、短期留学のプログラム構築が必要なのではないかという問いを掲げた。そこで本研究では、短期留学プログラムの実態調査と、日本人短期留学生がどのような英語話者を留学先での理想の対話者として位置付けているのか、ネイティブ信仰の有無を基軸に調査を行い分析し、今後、有効な短期留学の枠組みの構築を図ることを目的とした。これまで、英語圏短期留学の研究対象としては、アウターサークルの調査が十分なされてこなかったため、アウターサークルを対象に入れ、本研究の独自性と位置づけた。

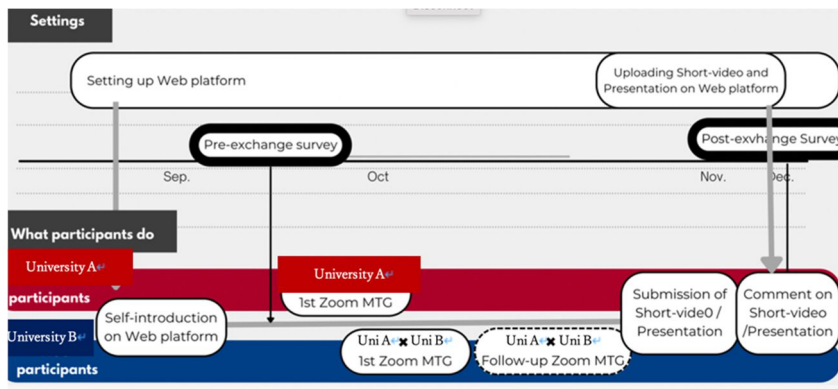
しかしながら、本研究実施初年度である 2020 年度より、新型コロナウイルスが蔓延し、それに伴い、各国で入国制限が行われ、各大学で、留学が実施不可能な状況となった。そこで、本研究の対象を物理的な移動を伴う留学から、オンラインでの国境を越えた言語交流に変更し、当初の目的にそって、研究環境の整理を行った。そのうえで、オンラインでありながら、いかに物理的な移動を伴う短期「留学」体験に近づけることができるのか、特に身体性と物質性という側面に焦点を当て、オンライン上でのコミュニケーション的な英語力の向上を実現するためのキーワードとして据えた。

3. 研究の方法

まず、物理的な移動を伴う留学から、オンラインでの留学の変更がどのように行われているのか実態調査を行うべく、国立大学にて提供されたオンライン短期留学参加者(4名)への質的インタビュー(2021年1月~3月)、オンライン短期留学実施大学(4大学)の担当職員への質的インタビュー(2021年11月~12月)を行った。

2022年8月には、入国制限の緩和に伴いシンガポールに渡航し、留学斡旋業者(1名)への質的インタビュー、ならびに現地でインターンシップを行っていた学生(1名)に質的インタビューを行い、オンライン学習や、語学学習留学との比較調査を行った。

2020年度からのオンライン留学の調査、これまでの物理的な移動を伴う留学の調査を受け、2022年9月には日本の私立大学(University A)の英語を学習する学生とシンガポールの大学(University B)の日本語クラスの学生とのオンライン上での国際交流プログラムを企画し実施した。オンラインプログラムの実施、ならびにプログラムに参加している学生(約400名)へのアンケート調査、質的インタビュー(4名)を行い、オンライン上の国際交流・言語学習の実態調査や、英語を使って他者と会話する際の理想の話者像、また、コミュニケーションを図る上での障壁などについて分析を行った。両大学(全50グループ)のZoomでのグループワークでの交流の様子は、すべて録画を行い、ビデオ分析資料とした。また、当該プログラムのために、Web上にプラットフォームを作成し、非同期型のコミュニケーションも促した。本研究に対しては、「立命館大学における人を対象とする研究倫理審査委員会」で承認を得た。



4. 研究成果

現在、データの整理と分析の継続中であるが、以下に、主に得られた成果をまとめて報告する。

1) オンラインでの国際・言語交流について

2020 年度に行ったオンライン短期留学実施大学の担当職員への質的インタビューで明らかとなったのは、受け入れ先大学が実施するオンライン大学の授業に Zoom で参加することが主たる授業内容であり、担当職員の語りからは、そのような授業形態を「留学」として位置づけることにやや抵抗を感じていることがわかった。「留学」という言葉自体が、これまで曖昧に定義されているという本質につながる問題提起が示された。また、参加学生の語りからは、言語習得という目的を主眼におき、効率的に学習をするという目標を掲げている学生にとっては、オンラインでの言語交流は満足度が高かったが、物理的移動を伴う留学をすることを目指していた学生にとっては、オンラインでの国際交流の満足度は低かった。彼らの語りから、留学体験を期待してオンラインでの「留学」に望んだ学生は、授業外でしか得られない現地での物理的な接触をオンライン環境下では得られないことに対する不満が見られた。このことから、留学を希望する語学学習者にとって、単に言語のスキルを習得するという事は、言語的情報を得ることではなく、身体的、物理的な情報が重要であり、その後の言語学習の動機づけとなりうることを示唆された。

2) 日本人英語学習者にとっての理想的な英語話者について

オンライン留学として提供されたプログラム参加者(交流先:オーストラリアとシンガポール)を対象に質的インタビューを行った結果、オーストラリアとシンガポールの両プログラムにおいて、最終的に習得したい英語はインナーサークルのなかでも、アメリカの英語である、という語りが多く見られた。学業スケジュールや費用の面で、妥協点として、オンラインでの留学先を選んでいく学生が多く見られ、参加者が理想とする英語をどのように位置づけながら、それがどのように英語学習の動機づけや、行動につながるのかさらなる分析を行っている。グローバル化社会の中で、対話の必要な英語話者は言語的背景が多様である。「正しい」(と思われる)文法や発音に執着することが、むしろ、学習者のコミュニケーションな英語力の育成を妨げる可能性が示唆された。

3) コミュニカティブな英語力習得について

本研究の対象をオンラインに再設定したが、これまでの自身の先行研究で明らかとなった物理的移動を伴う留学が特権的に可能とする身体的、物理的な文化接触を、いかにオンライン環境で可能とし、英語を話す多様な話者とのコミュニケーションな英語習得を促すかについて実践を試みた。シンガポールの大学に所属する日本語正課授業の受講生約 100 名と、日本の私立大学の教養科目の受講生約 15 名、申請者所属大学英語科目の受講生 120 名を参加者として、実施した。シンガポールの大学生数名に対して、日本の大学生数名がチームとなり、協働作業ならびに協働制作に取り組み、設定したテーマに基づいて研究計画をたて、最終的な成果物として独自の視点から、創造的な 5 分程度の動画を、二言語を併用して制作した。オンライン下では、学習者同士はパソコン上でのやり取りにとどまり、学習体験が制約される傾向があるが、本研究では、非同期型のビデオ制作を通じた交流、ならびにオンライン上での同期型の交流を組み合わせたマルチモーダルな学習環境を提供することにより、いかに身体性、物質性をまきこんだ言語習得がオンライン上でも実現可能かどうかを考察した。そのほかにも、言語的、視覚的やりとりを行うことができる Web 上でのプラットフォームを作成した。データは分析可能なように保存されており、zoom の動画分析、会話分析、Web プラット上でのテキスト分析を現在行っている。また、アンケートの統計分析を行い、プロジェクトの効果について検証した結果、視覚情報やテクノロジーの活用が推奨された今回のオンラインでの交流について、相手との意思疎通、親近感、情報伝達、心理的負担、効率性、感情の共有など多くの項目で、オンラインの方が円滑に進むと考える日本人学生が有意に増加するという結果が見られた。

また、参加者への質的インタビューならびに録画した zoom ビデオの分析より明らかになったのは、オンライン学習であっても、聴覚だけでなく嗅覚や触覚を物理的に「体験」することを重視していた参加者は、オンライン上でのシンガポールとの学生との交流において、インターネット上の情報や視覚的情報を有効に使い、言語的情報のみに頼らずコミュニケーションを図ろうとしていた点である。このことから、聴覚だけでなく、視覚や嗅覚や触覚といった感覚体験をマルチモーダル学習デザインに取り入れることで、オンライン学習の場が、机上での画面を通じた交流だけでなく、より留学体験に近づけるための足場かけの役割を果たすことが示唆された。本プロジェクトの事例は、教育関係者が、特に留学経験のない学生に対して、コミュニケーションな英語を実践するためのオンラインでの国際・言語交流を促す事例となりうる。分析されたデータは論文(英文)にまとめており、国際ジャーナル(Innovation in Language Learning and Teaching)に投稿し査読に回っている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 北野知佳	4. 巻 23
2. 論文標題 ジェンダー化される留学とキャリア	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ジェンダー研究 : お茶の水女子大学ジェンダー研究所年報	6. 最初と最後の頁 185-206
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24567/00063802	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Chika Kitano
2. 発表標題 Students' perspectives on study abroad online
3. 学会等名 4th Biennial Asia Pacific Virtual Exchange Association Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 北野知佳
2. 発表標題 Who should be ideal English speakers? Japanese male college students' experiences in Australia
3. 学会等名 IV ISA Forum of Sociology (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 北野知佳
2. 発表標題 日本人短期留学者が理想とする英語話者のイメージと留学中の言語実践について
3. 学会等名 第45回社会言語科学会研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Chika Kitano, Yoko Morikawa
2. 発表標題 Co-creative online language learning
3. 学会等名 The 3rd Southeast Asian Conference on Education, International Academic Forum (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 北野知佳、大崎智史、唄邦弘	4. 発行年 2021年
2. 出版社 京都芸術大学 東北芸術工科大学 出版局 藝術学舎	5. 総ページ数 116
3. 書名 問う社会学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
シンガポール	シンガポール国立大学		